

お雇い外国人フルベッキと生徒達

村 瀬 寿 代

ギドー・ハーマン・フリドリッヒ・フルベッキは1859年（安政6年）、日本に最初に派遣された新教宣教師の一人である。彼は明治新政府にお雇い外国人としては破格の好待遇で招かれるが、それは来日後十年を過ごした長崎での人脈によるところが大きい。従来、はっきりしなかった長崎での人脈を一部特定した。彼は宣教師として来日したにもかかわらず、日本の教育・外交・政治・留学生派遣・外国人教師の紹介などに大きく貢献した。それには後述するようなフルベッキの宣教への取り組み方、彼を派遣したアメリカのオランダ改革派外国伝道局の自由な考え方が背景にある。

長崎でフルベッキに接触した人物に、唐通事である何礼之^{がのりゆき}と平井義十郎がいる。彼等は1860年（万延元年）の春からフルベッキのもとで学びはじめ、頭角をあらわし、幕府が通弁養成のために開いた済美館の学頭となった。フルベッキの残した書簡と済美館関係、当時の唐通事・蘭通詞など周辺を調査することで何礼之と平井義十郎が最も初期の生徒であると特定した。フルベッキと彼等との関係はその後途切れることなく続き、新たな人脈へと展開する。

何礼之は長崎で私塾を開いたが、その中には優秀な人物が数多くいた。フルベッキは何の私塾でも教え、助言を与えていたので、何の生徒達も彼が直接教授したと考えられる。何の生徒達の中には海援隊士が含まれている。陸奥宗光はじめ白峰駿馬^{しらみねしゅんめ}、野村維章、菅野覚兵衛等のような直接の海援隊士だけでなく、海援隊関連者もいた。彼等のうち、ある者はフルベッキの手を借りてアメリカに留学を果たしたり、維新後も教えや助言を受けていたと見ることができる。

佐賀藩とフルベッキの密接な関係はよく知られている。フルベッキは佐賀

藩士の教育だけではなく、聖書を教えることを通してのつながりもある。後にフルベッキから洗礼を受ける佐賀藩家老、村田若狭の家来である本野周蔵は、まず聖書を通じてフルベッキに接触したものと思われる。本野はフルベッキからキリスト教関連の書物をもらい、聖書を学び、それを佐賀の村田若狭に伝えた。おそらく、1861年（文久2年）初頭、もしくはそれ以前のことであろう。他の佐賀藩士の記述やフルベッキの証言から、本野は最も早くフルベッキに接触した佐賀藩士であろうことが推定できる。本野とフルベッキの関係は後に大隈重信等他の佐賀藩士達との関係、そして佐賀の学校である致遠館へとつながっていく。

維新後活躍することになる多くの優秀な人物達と接触したフルベッキは、日本の可能性を彼等の中に見出し、日本はやがて西欧諸国に対抗する近代国家になると確信した。また、キリスト教禁制下で宗教を押しつけても何の益もないと判断し、まず近代国家建設が急務であると考えた。そのためには何を差し置いても援助と助言を惜しまなかった。彼の日本への貢献の背景には、オランダ改革派の外国伝道局主事、ジョン・フェリスの協力を看過することはできない。資金難という実際的な問題があったにせよ、一宣教師に自由な行動を許し、日本人留学生の世話や外国人教師派遣にも貢献した。

残念ながらフルベッキの貢献、人脈、宣教などを総括した研究は行われていないようである。フルベッキ研究において、残された多くの未知の部分を解き明かすことで、日本近代化の異なった局面がさらに明らかになることであらう。